

Jean-Luc Godard

Je Vous Salue,

Marie

Myriem Roussel Thierry Lode Philippe Lacoste

Juliette Binoche Anne Gauthier

Anne-Marie MIEVILLE
LE LIVRE DE MARIE

Bruno CREMER
Aurore CLÉMENT
Rebecca HAMPTON
Copi

1984 / Français, Suisse / 1h48 Distribution: zezie films, inc.



a copyright Gaumont

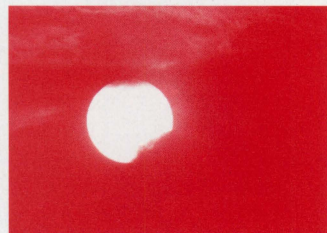
ゴダールのマリア

R-15



マリアMARIEのなかには愛AIMERがある

1984年、上京と同時にゴダールの復活にぶつかった。衝撃は凄まじく、突然ゴダールが師匠になった。『パッション』『カルメン』『探偵』、そして『マリア』。思春期をパンク小僧として過ごした者にとってその歩みは、元祖パンクの大家バンドが極度にフリークアウトしまくった新譜を毎年リリースするのと同等の興奮を与えた。例えば、当時すでに隠遁したキャプテン・ビーフハートの穴を埋めるに余りある、そのフリークアウトぶり。いったい誰が、現代の処女懐胎を、ガスステーションの一人娘であるバスケット少女に託すだろうか。いったい誰が、アル中の浮浪者に大天使を名乗らせるだろうか。そしてお腹の子の父は、タクシー運転手!? おまけに全速力で疾走するフィルムはたった80分!?・・・フリークアウト・ゴダール。60年代をあっさりモード化した広告業界もこれには手が出ないだろう。だから80年代ゴダールは、永遠に新しい。特に『マリア』は新しい。—— 青山真治(映画監督)



『ゴダールのマリア』は、『パッション』の次作『カルメンという名の女』と『ゴダールの探偵』の間に撮られた。だが、『ゴダールのマリア』は、その前後の作品はおろか、他のゴダール作品とまったく似ていない、特異な美しさに溢れた映画である。ただ、ここで『ゴダールのマリア』として公開される作品は、アンヌ＝マリー・ミエヴィルによる短篇「マリアの本」とジャン＝リュック・ゴダールによる長篇「こんにちは、マリア」を合わせたものである。このふたつの作品は、主人公の女性がマリーという名であることを除けば、直接の物語的関連はない。だが、ゴダールによって、この2作品は切り離せない形で提示されている。実際、「マリアの本」の終わりと「こんにちは、マリア」のはじまりは、編集でつながれて、同一のロールに収められ、単独では上映できないようになっている。『ゴダールのマリア』は、欧米でセンセーションを巻き起こした問題作となった。それは、「こんにちは、マリア」が、聖母マリアの処女懐胎とキリストの誕生を主題としたからである。キリスト教の信仰への冒瀆だとして、パリ封切り時には、カトリック系団体の大規模な抗議運動が起きた。フランス全土での上映禁止を求める訴訟は却下されたものの、パリ、ローマ、ニューヨークなど、上映劇場前で路上ミサや観客への入場妨害などが頻出した。しかし、ジャーナリズムからの反響は素晴らしく、作品への賛辞が相次いだ。

ゴダールは、この主題を現代のジュネーブに移植した。主人公のマリーはバスケット部に所属する女学生。処女マリーの夫となり、交わらずに父となるのを引き受けるジョゼフはタクシー運転手である。天使ガブリエルは、そのタクシーの客として、マリーに受胎告知を告げに行くのだ。その際、ゴダールが参照したのは、聖書ではなく、フロイト派の精神分析医であり、敬虔なカトリック教徒でもあるというフランソワーズ・ドルトの「精神分析にさらされた福音書」だった(シナリオに直接引用されている)。原題の“Je vous salue, Marie”は、新約聖書の「ルカ福音書」第1章で、天使ガブリエルがマリアにイエスの誕生を告げるくだりの言葉で、「めでたし、マリア」の意味である。

「マリアの本」は、28分の小品ながら、爽やかな風が吹き抜けるような素晴らしい作品だ。両親の別居という事態に直面した11歳の少女の思春期のはじまりを繊細に描いている。とりわけ父親が残したマーラーの曲を聴きながら、こみあげてくる衝動に身を任せて、手足を動かし始め、自己流のダンスを演じる場面の美しさ。自然のモンタージュではじまり、林檎の使い方を経て、殻を割られる卵のアップで終わるといった構成の妙味も含めて、「こんにちは、マリア」の見事な序章になっている。「マリアの本」というタイトルは、マリーが繰り返し読むボードレールの詩集「悪の華」から来ていると思われる。マリアを演じるレベッカ・ハンブトンの初々しさが印象に残る。両親が、ブルノ・クレメールとオロール・クレマンという組み合わせなのも魅力的だ。



こんにちは、マリア Je vous salue, Marie

1985年ベルリン映画祭インターフィルム賞・OCIC功績賞

監督:ジャン＝リュック・ゴダール/撮影:ジャン＝ベルナル・ムヌー、ジャック・フィルマン/録音:フランソワ・ミュージー/出演:ミリエム・ルーセル(マリー)、ティエリー・ロード(ジョゼフ)、ジュリエット・ピノシュ(学生ジュリエット)

1984年/フランス+スイス/80分/カラー/スタンダード 日本語字幕:寺尾次郎 配給:ザジフィルムズ

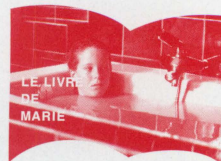
R-15

マリアの本 Le Livre de Marie

1986年セザール賞 最優秀短篇賞候補

監督:アンヌ＝マリー・ミエヴィル/撮影:ジャン＝ベルナル・ムヌー、ジャック・フィルマン、カローヌ・シャンプティエ、イヴァン・ニコラス
録音:フランソワ・ミュージー/出演:ブリュノ・クレメール(父親)
オロール・クレマン(母親)、レベッカ・ハンブトン(マリー)

1984年/フランス+スイス/28分/カラー/スタンダード
日本語字幕:寺尾次郎 配給:ザジフィルムズ



JEAN-LUC GODARD特集レイトロードショー!! 連日 20:50より上映

「恋人のいる時間」 1月11日(土)～1月24日(金)

「パッション」 1月25日(土)～1月31日(金)

「ゴダールのマリア」 2月 1日(土)～2月 7日(金)

特別鑑賞券¥1,500(当日一般¥1,800)好評発売中! <http://www.zaziefilms.com/koibito>

劇場窓口でお買い求めの方には、オリジナルポストカードをプレゼント!!(先着限定)

★「ゴダールのマリアのためのささやかな覚書」
DVD付特別鑑賞券発売中!!(数量限定)

大丸東側 神戸朝日ビルディング B1F

シネリーブル神戸

078(334)2126

www.nikkatsu.com